書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会

吹田市千里山17
TEL 388—1121
内線 776

「書評」復刊宣言

組織部「書評」編集委員会

われわれが、〝試行〟せんとした「書評」誌は、歴史の断絶を体験した。この「断絶」への告発を媒介として、われわれは、歴史の射影を観測する義務がある。そのことは、日常不断に激烈な営為の〝所産〟を疑い、その「根拠」を問いただそうとすることはわれわれの責務である。

現代―極めて激しい厳い現実の日々―過渡期の廊下を怪しげな〝歩み〟を積み重ねとして生起する現実……。

「大学の危機」は「大学への絶望」として串刺しされ「架空の大学」が、大気のなかであたかも融和されたごとく存在する現実のなかで〝大学価値〟の無価値への転化。

「羽田」「佐世保」の闘いが、全く新しい価値基軸を歴史に刻み、さまざまな「評価」と「愚弄」「蔑視」を投げつけたなかでの「政治」の無価値の価値への転化。

この様な価値創造―価値観の多様化の現実にいかなる訣別を画すかが現代に問われている。価値―その創造は、いかなる意味においても、現代社会の人間生活における熾烈な営為の歴史的意味に他ならない。その意味の葛藤が人間諸関係を、現実ほど厳しく、冷酷にひき裂く時はない。その冷酷な仕打ちに耐える〝根拠地〟の礎を、新たな価値へと結合させていく苦悶の連続としてわれわれの日々はある。

関大において、その投影図がどの様に縮図されているか「書評」誌への参画者に一任する。その一任に対する責任は自己が負うが良い。関大の荒漠を嘆くものは、その嘆きの意味を。高唱するものはその意味を。その確定され、いや未確定の地点から苦闘の連続はある。

あらゆる人間諸関係がゆらぐ現代の中で「書評」誌が、いかなる「分離と結合」をかちえるか、どのような歴史の功罪と告発を強いるか―その「問い」への擬制解答を拒否して作業を進行させていかねばならないであろう。

「書評」誌は、人間諸関係の〝断絶〟をあくまで追求する地点を問うものである。それは多様な人間の英知を告発する意味である。その「告発」の中から、現代史が、一貫として解決せぬままに進行してきた〝人間のあり方〟にわれわれが挑戦することにもなる。その挑戦は、単なる「知」の合作ではなく、時代の先端の意識の獲得の中から生みだされるものである。意識の先駆性にいかなる現実の重みが付着しているかがわれわれの挑戦の意義であろう。

「書評」誌に参画する者は、あらゆる自由をもつ、その「自由」の意味を、ここで確認すべきではなく、参画者の接近の仕方の中から「自由」の確認をくりかえしくりかえし問いただしていくことにする。

かくの如き「実践」「行為」の中からわれわれは改めて「書評」誌のもつ意義とその参画者による「思想の根拠地」を不断に関大内において模索し、「書評」誌の断絶の克服をなしとげることとする。

ヴァルター・ベンヤミン著
川村二郎・高木久雄
高原宏平・野村修 訳
「複製技術時代の芸術」

危機の美学
ファシズムへの抵抗として
人間の社会化における複製芸術

小川　悟

一つの表現形式としてのエッセイの持つ、錯綜した分析不可能に近い部分をわれわれは指摘することができる。その部分は、ある種の学術論文の持つ明快な部分とは本質的に相容れないもののようである。エッセイという表現形式の持つかかる部分が、読者にどのように理解されるかということが、私にとって一つの興味の対象になる。多分、エッセイは既存の学術論文的表現形式に対する否定的発想によるものであろうか。

本書に収録されたベンヤミンの九篇の文章は、読者に根気を必要とする思考を要求することだろう。いうなれば難儀な書物である。しかし三十年代に書かれたこれらの文章が、今日要請されたものとして（私は敢えてこういう言葉を使う）われわれの手にあるということは、今日の思想的混乱もしくは（むしろ）思想的不毛の状況のしからしめる所以であろうか。またベンヤミンの思想が今日の思想的状況の克服のために、どれほどの役割を果すかということに対しては、すでに回答は明らかであろう。そしてこの回答から出発してわれわれはさらに困難な思惟の過程を通らなければならないだろう。

「どれほど精巧につくられた複製のばあいでも、それが「いま」「ここに」しかないという芸術作品特有の一回性は、完全に失われてしまっている。しかし、芸術作品が存在するかぎりまぬがれえない作品の歴史は、まさしくこの存在の場と結びついた一回性においてのみかたちづくられてきたのである。さらに時のながれのなかで作品がこうむってきたその物質的構造の変化や所有関係の変遷をここで考慮しないわけにはいかない。」（複製技術の時代における芸術作品）作品の真贋に関するベンヤミンのこの提言は、実質的な古さを基礎としている歴史的な証言力に対する否定的志向を示している。「実質的な古さが人間にとって無意味なものとなってしまう複製においては、ひとつの作品のもつ歴史的証言力などはぐらつかざるをえない。もちろんここでぐらつくのは、歴史的証言力だけであるとはいえ、それにつれて作品のもつ権威そのものがゆらぎはじめるのである。」これは、複製技術の発達によって、**オリジナルの模造品をオリジナルそのものではとうてい考えられない状況のなかにおくことができるということと無**関係ではない。

複製技術の発達は、大衆と作品の距離の関係を変えたといえよう。しかし、それが、つまり両者の距離を縮めたということが、決定的に大衆を変革し得るということと直接的に関連があるかどうかは未だ問題を留めている。ベンヤミンは「複製技術のすすんだ時代のなかでほろびてゆくものは作品のもつアウラである」という。彼によればアウラとは、どんなに**近距離にあっても近づくことのできないユニークな現象**ということである。このアウラの消滅こそ、複製技術の発達した時代の特徴であり、複製技術は複製の対象を伝統の領域からひきはなしてくるもので「複製技術は、これまでの一回かぎりの作品のかわりに、同一の作品を大量に出現させるし、こうしてつくられた複製品を、それぞれ特殊な状況のもとにある受け手のほうに近づけることによって一種のアクチュアリティを生みだしている。このふたつのプロセスは、これまでに伝承されてきた芸術の性格そのものをはげしくゆさぶらずにはおかない。」これはあきらかに伝統の震撼であり、現代て、の危機と人間性の革新と表裏一体をなすものである。こんにちのはげしい大衆運動もこれと無縁ではない。」

ベンヤミンは、古代のヴィーナス像を引き合いに出し、ギリシャ人の場合はそれが礼拝の対象であり、中世カトリックの僧侶の場合は、災いにみちた偶像であったことから、この両者は異なった伝統にかかわっていたが、ヴィーナス像のもつ一回性という点においては、即ちそのアウラという点で共通していたという。ここから、彼は芸術の礼拝的側面を汲み取る。芸術作品には、この礼拝的価値に、即ち儀式性に支えられる側面と、展示的価値に支えられる側面のあることを指摘する。それはひっきょう作品に接するものの持つ二つの態度である。このように、複製技術が芸術作品を儀式への寄生から解放したという論理をわれわれは写真や映画ないしレコードなどに見出すことができる。

ベンヤミンは、写真技術の登場と社会主義の台頭によって、芸術は「芸術のための芸術（ラアール・プール・ラアール）」という芸術の神学の教義のなかに逃げ込んだといい、このいわゆる「純粋」芸術の文学の代表者はマラルメであるとする。しかし、複製技術が絵画や彫刻などを中心とした場合には、それが変革に通じるものであることが理解されるが、文学の場合にはいささか事情が異なるだろう。もちろん文学作品にも、その礼拝的価値のみが認められることによって存在しているといった類のもののあることは否定できない。

それは、作品にある絶対性のみをみることで、その作品の存在証明をしようとする態度の所産であることはいうまでもない。文学の社会的かかわりあいをみようとしないときに、人は文学に絶対性を植えつけ、それによってある種の安堵感と満足感をえようとする。ともあれ、文学に展示的価値を見出すことの可能性、不可能性に関しては検討を要することであろう。文学・とりわけ詩や小説のジャンルに属す表現形式の作品は、かく大別される価値観によっては貫かれないものである。

従って、ベンヤミンがいうように、芸術作品の複製技術は、芸術にたいする大衆の関係を変化させるということは否定しないまでも文学作品（たとえば、芝居や映画の原素材としての、といってもよい）自体の機能をつぶさに考える時、われわれは文学作品は**複製さ**れたものでないということに気付くだろう。ベンヤミンは新聞の急速な発達が読者を執筆者にすることを可能にしたという。もちろん彼は天才性とか永遠の価値とか神秘とかいう概念を排除するわけであるから、執筆者もしくは作家を専門という領域において特殊化しようとしないのだが、実は**読者が執筆者**になる可能性は両者が社会的な意味でかかわり合っている限りあることである。「映画では文学が幾世紀をも要した数々の推移と変化を十年間で実現してしまった。―ソヴィエト映画で出会う一部の俳優たちは、ふつうのいわゆる俳優ではなく―まずなによりもその労働課程のなかで―自己を表現しているひとびとである。西欧では、自分自身の姿を再現したいという現代人の正当な要求が映画の資本主義的搾取によって無視されている。このような事情のもとで、映画産業は、荒唐無稽な空想やいかがわしい思惑によって大衆を動員することに血道をあげるばかりである。」なる程、映画においては、とりわけソヴィエト映画においては、俳優は労働課程の中で自己を表現している人間であるといえよう。映画に対するベンヤミンの発言は、今日も生きている。またダダイズムは、彼のいうようにたとえばリルケの時に対す**る時に要求される精神の集中と沈潜の非社会的姿勢に対して、まさに社会的姿勢といえる激烈な逸脱の姿勢**を要求する。しかしながら文学としてのダダイズムは、いうなればダダはダダという精神の内部にいかなる具体性を獲得したのであろうか。それは「芸術作品の魅惑的な外観とか圧倒的な美しい響きは、ダダイズムにおいて一発の銃声と化してしまった。**それは観客に命中し、具体性を獲得した**」といわれるものである。**観客に命中することによって**獲得された具体性とは、まさに社会性ということである。

ベンヤミンは、複製技術の時代における芸術作品を通して、ファシズムの胎内から生れる美学に挑戦する。彼にとっては、既成の文学概念では律し得ない、まさしく変革に通じる新らしい作品が問題になる。彼はいう。「芸術に栄えあれ、よし世界のほろぶとも」とファシズムはいう。ファシズムはマリネッティが告白しているように、技術によって変化した人間の知覚を芸術的に満足させるために、戦争に期待をかけているのだ。これは、あきらかに「芸術のための芸術の完成」である。―人間の自己疎外はその極点に達し、人間自身の破滅を最高級の美的享楽として味わうまでになったのである。これがファシズムのひろめる政治の耽美主義の実体である。共産主義は、これにたいして、芸術の政治主義をもってこたえるであろう。」

ベンヤミンは、複製技術による展示の効用の反面に、危険性を認める。それは殆ど危険性といってもよいものである。たとえば俳優がカメラの前で背景を越えた唯一の存在の絶対性に自己を変えてしまうことができるのと同様に政治家にあっても器械装置の前では、**自己表現する人間の機能を変化させられてしまう**。このことは「特定の社会的条件のもとで、諸種の技能を吟味し、そのなかからとりあげることのできるものを展示することを、めざしている。それは新しい選抜方法、器械装置によるセレクションを生みだし、勝者としてのスターや独裁者を登場させる」ことになる。

ベンヤミンによって洞察されたものは、確かに今日も生きている。彼は技術の変革がもたらす人間の変革、且つまた社会的変革の背後に潜むものを夙に看取していた。今日、**ベンヤミンが要請されたものとしてあるとすれば**、まさにこの点をおいては彼を論じることはできないであろう。この書物の題名になっている「複製技術の時代における芸術作品」という一篇に触れて、彼の芸術観の一端を書いた。翻訳は（つまり日本語として）、よくこなれているので読み易いが、訳者自身の註に不十分な点のあることがいささか残念である。翻訳された作物は、**誰にでも読まれなければ**ならないものであるから、その点の配慮が今少し欲しいところである。

（関西大学文学部助教授）

（本文中ゴヂック体の個所は原稿傍点の個所です）

「新集・世界の文学」
中央公論社から全46巻

現代人としての基本的な教養はもちろん、愛と知性を養う必読の名作を意欲的に選出。ドス・パソスの「マンハッタン乗換駅」などわが国で未紹介の重要な作品や、クノー、ガッダなどユニークな現代作家の代表的作品を多数収録。

第一回配本
トルストイ・原卓也新訳
「戦争と平和I」四八〇円
生協書籍部で発売中。

アリストテレス全集
岩波書店より全十七巻刊行

アリストテレスの大理石像　ウィーン美術館所蔵

アリストテレスは、その師プラトンとともに西洋哲学史の源流に位置を占める哲学者である。近代の諸科学はアリストテレスを克服することによって成立したが、それにもかかわらず明確な論理的思考と実証的な、経験とを重んずるその学問的精神は今日もなおすべての学問のうちに生きつづけている。西洋の学問的伝統を根本的に理解するためにはどうしてもアリストテレスに遡る必要がある。

今回岩波書店より刊行されるアリストテレス全集（全十七巻）は、監修出隆、編集山本光雄になる、現存するアリストテレスの全著作の邦訳という、画期的な全集である。収録した著作の過半数が本邦初訳であるということも興味深いことであり、従来、著作名のみ知られながら、その内容に接することができなかったものもはじめて一般の訳者に開放されることになる。各巻の内容はつぎの通り。

第一巻　カテゴリー論　命題論　分析論前書　分析論後書
第二巻　トピカ　詭弁論駁論
第三巻　自然学
第四巻　天体論　生成消滅論
第五巻　気象論　宇宙論
第六巻　霊魂論　自然学小論集　気息について
第七巻　動物誌（上）
第八巻　動物誌（下）　動物部分論　動物運動論
第九巻　動物進行論　動物発生論
第十巻　小品集
第十一巻　問題集
第十二巻　形而上学
第十三巻　ニコマコス倫理学
第十四巻　大道徳学　エウデモス倫理学　徳と悪徳について
第十五巻　政治学　経済学
第十六巻　弁論術　アレクサンドロスに贈る弁論術
第十七巻　詩学　アテナイ人の国制　断片集

（各巻の平均定価は一八〇〇円）

佐伯彰一著

「文学的アメリカ」

日本的精神との対比から

現代アメリカの内部へ論及

——田村民夫——

「文学的アメリカ」と題するこの書は、その名からもわかるように、従来の「アメリカ文学史」的な書に見られる味も素気も無い、文学の説明書・概括書ではない。「文学的」というイメージは、すでに「文学」の対語たる範疇のイメージを想定させるが、この書全体を通しては「文学的」域を出るものではなかろう。

著者の佐伯氏は「文学的アアメリカ」を執筆する際に二つのことを念頭に置いている。

一つは、（著者自身も断っているのだが）文学を読む場合日本人としてというような意識的な態度が必要かどうかは別の問題としてアメリカ文学をアメリカ人としてではなく、一外国人（日本人）として外から眺めたこと。

一つは、アメリカ文学の活力の秘密を追求するためにも、アメリカ人のイメージを描きあげたということ。

これらの二つの意図のもとに書かれたこの書が、従来のアメリカ文学史、文学論とはちがった内容形式の書であることは当然のことである。そしてその内容もアメリカ文学と日本文学の相互関係を種々の資料に基づいて叙述するなど、この書を大変面白くユニークな存在にならしめている大きな理由である。

この書は、Ⅰ「隣国としてのアメリカ」Ⅱ「ニュー・イングランドとの触れあい」Ⅲ「清教徒主義のゆくえ」Ⅳ「一九二〇年代における獲得と喪失」Ⅴ「西部の勝利」Ⅵ「雑種国アメリカ」の六章から成っている。

冒頭の「隣国としてのアメリカ」のなかで、著者は、「アメリカは、日本にとって、直接の隣国である。まずはじめに、この事実をはっきりと確認しておく必要があるだろう」と前置きしている。佐伯氏にとって、「オリンピック」は、日本人の空虚なインターナショナリストを暴露し、日本人ぐらい、「世界」をスローガンとして物好みする人種はいない、と否定的である。だから「世界」を把握するためには、まず身近な隣国を知るべきだ、という著者の認識は、単に英文学者としての我田引水にとどまらず「世界」がますます狭くなりつつある現代だけにわれわれにも興味深い意見である。

さて、今日「太平洋のイメージ」といっても、常夏の国・ハワイを思い浮かべるのが精一杯である。ところが、百十余年前当時のちょんまげ姿の鎖国日本にあって「太平洋」のもつ意味は極めて重大なものがあったであろう。日本とアメリカの最初の接触は、捕鯨業であったことを、ハーマン・メルヴィルの代表作「白鯨」を媒介にして説明して呉れる。ペリーの浦賀来航も捕鯨船のための基地の確保であったのであるが、当時のアメリカの積極的な太平洋進出を、文学作品を通して理解しようと試みるところに、意義がある

第二章の「ニュー・イングランドとの触れあい」では、時の幕府の戒厳令下にあって、日本の果敢な青年が、続々とアメリカへ密航し、成功した例を取上げている。そして、日本人たる「大和魂」・「武士道精神」とアメリカ人の「清教徒主義」とを相方の文学作品並びに芸術作品とを照応させることによって、一九六〇年代の今時点にもあてはまるような両国の共通性を、明言している。

例えば、ペリーの再来航時に、下田沖へ米船にこぎ寄った吉田松陰。一八六四年、函館から脱出を企て、翌年ボストンに到り着いた新島襄。伊藤博文、井上馨然りである。

清教徒主義といえば、「ニュー・イングランドのピューリタニズム」を想起するが、新島がアメリカで接触した人達が、偶然にも、ニュー・イングランド人であったことが、新島を今日の新島にさせたようである。「まず新島の「国家のために…中心燃えるが如く」というひたむきな愛国心が南北戦争前後のニュー・イングランド人の心情に訴えたということがありさらには、彼の武士気質のはげしい求道心、信仰心が、清教気質と親密な共鳴を生じたという事情が見逃せない」と、著者はのべている。

徳川幕府の長年の鎖国政策を脱皮して、文化の遅れを取り戻そうとする島国日本と、独立百年を契機にして真の民主主義国建設をモットーとする大陸合衆国とでは、文化の交流とはいっても、大きな影響を受けたのは日本であった。しかし、この頃からアメリカ人の日本に対する関心は高まり、著者も紹介しているように、フェノロサの「東洋美術史綱」、エドワード・S・モースの「日本その日その日」等々は、この高まりを示す以外の何物でもなかろう。ただ私が敢て問題にしたいと思うことは、日本が積極的に太平洋を横断し、合衆国に出向いたことは理解出来るが、アメリカ人が小さな島国日本に関心を寄せたことである「白鯨」やペリー来航に見られる捕鯨船の基地確保、あるいは新島をはじめとする個人的な接触によって東方の黄金国に魅せられたためなのか。

内村鑑三や新渡戸稲造等が、「武士道」、「大和魂」なるものを、アメリカで紹介している歴史的事実からも、著者は、「武士道」と「清教徒主義」の関連性を述べたものと判断される。佐伯氏によれば「南北戦争とわが国の明治維新は、ほぼ同時期に重なりあっており、内戦という危機をのりこえて近代的な統一国家へのスタート・ラインに着いた点では、時期のみにかぎらぬ共通性がみとめられる

規模はちがうにしろ、まずなにより富国強兵的な実利主義、物質中心主義に重点をおかざるをえなかった点も似ている。そして、近代国家としての装備がととのうやかたや米西戦争、かたや日清戦争と、海外進出にのりだしたのが、また同じ時期であった。」とし、それらの内的起爆力を「清教徒主義」ならびに「武士道精神」に求めている。社会的、現実的事件が即物的な反応のみから派生するものではなく、一国の国民を形成している土着的な無意識性とでも名付けるべき「…精神」的なものに依拠することを考慮に入れるとしても、著書の発想は、（文学者にしばしばみられがちだが）ないものねだり、こじつけ、ロマンティックの発想以外の何物でもなかろう。

第三章「清教徒主義のゆくえ」ではかの有名なホーソンの代表作「緋文字」を例にして「姦通小説」の清教徒的意味を問い正している。著者は、「緋文字」を歴史小説と規定し、森鷗外の「阿倍一族」や「護持院ケ原の敵討」が、江戸時代の武士社会の不合理性を追求する啓蒙主義的小説ではないのと同様に「彼らはともに、過去のなかにまず虚心に身をひたし、過去の生きた再現、喚起をはかっている。彼らはむしろ過去の方につよく心惹かれていた、と言いきってもよい。」と。敵討の中途で脱落した山本宇平の姿を描いたのが「護持院ケ原の敵討」であるが、宇平を封建制批判者と断定出来ないととは当然であり、「緋文字」のヘスタ・プリンに対するホーソンの筆致も、必ずしも、反清教徒主義では割り切れない。文学の自立性・真髄性とは、そもそもこの辺りにあるのであろうが、佐伯氏は、「作品」を媒介にして力強い文体で文学論を説くプロセスに、著者のアメリカ文学に接する情熱や喜びが自信となって表われている。

第四章の「一九二〇年代における獲得と喪失」の著者のねらいは簡単にいえば、「マンハッタン乗り換え」や「武器よさらば」等々の小説に代表される第一次世界大戦後のアメリカ文学が、「緋文学」や「白鯨」の一八五〇年代の文学と比較して、どのように大きく変遷したのか、ということである。またその変遷は何が原因であり、その結果「得た」ものは、「失った」ものは何か。そしてそれらの功罪が、現代アメリカ文学に如何様に影響しているのか、という問に答えるためである。

文学らしからぬ「植民地文学」から出発し、十九世紀半ばの「清教徒文学」へと一般的に語られるのがアメリカ文学である。その一国的文学がその領域を乗りこえるためには、必ずスケールの大きい傑出した人物が現われるものである。一九二〇年代文学は、勿論客観的には、第一次大戦によるヨーロッパの新鮮な文化が、アメリカの発剌たる若年作家に刺激を与えた結果に起因することはいうに及ばない。しかし、既にアメリカ土壌に倦怠を覚え、一足先に新しい価値観を得ようと努力して、ヨーロッパへエグザイルしたヘンリー・アダムズやヘンリー・ジェイムズ等々の国内的ムードも決して忘れることは出来ないだろう。いわば斯様な条件のもとに一九二〇年文学が、現在「世界文学」として堂々と威厳を保っているのではあろう。

ヘミングウエイの「日はまた昇る」フィッツジェラルドの「楽園のこちら側」などの作品は当時のアメリカ人の意気揚々たる姿を見せてくれるのである。そして著者は「公的なものと私的なもの、アメリカの国家的な興隆と、文学的な自意識とは、やはり隠微な形で対応しあっていた、というべきだろう、一次大戦のアメリカが、世界の指導的な国家としての位置を確保するに至ったという公的な、外的な事態と、みずからの文学的過去の発見、評価という私的、内的な動きとは、やはりどこかでつながりあっていた」と書いている。

最後の章「雑種国アメリカ」は、黒人文学隆盛と重なりあって、極めて一読するに価するものである。ここでは、アメリカ人の少数民族差別意識が、どれほど根深いものであるかを文学作品（小説）を通してわれわれに教えてくれる。まさに現代アメリカ社会が抱える諸問題の根源は「雑種性」に原因するといっても過言ではないだろう。

スタインベックの「怒りの葡萄」や「エデンの東」に見られる、人種的意識の筆致。「日はまた昇る」のなかでユダヤ人を扱かうヘミングウェイ並びにユダヤ系の作家ノーマン・メーラーの「裸者と死者」等々。これらの作家が作品に期待するのは、政治的・社会的野心あるいは文学的野心と種々様々であるが、とにかくアメリカ文学の偉大な作品は、「人種」に関するものがあまりにも多い。

最近の黒人の「公民権運動」の高まりと相前後して黒人作家の台頭が目立っている。著者は、日系の二世と黒人の論争や「人種問題というのは、結局は、ぼくら自身自分の黒さに自信と誇りがもてるようになれるまでは解決できない」という某黒人学生の現実の生の声やジェイムズ・ボールドウィンの「もう一つの国」を引合いに出すなど、ニグロ問題の深刻さを訴えている。

「いったい雑種的、異質的な人間たちの特殊的、個別的な自己証明が、アメリカ人たることの一般性、普遍性にからみあい、ぶつかりあうところに、アメリカ文学の活力の源が存する。さまざまな異質性と断絶を内にふくみながら、一個の有機的な連続を作りあげてゆくアメリカ文学の現実と将来はぼくらにとって切実な関心事たることをやめないだろう」と結んでいる。（文学部三回生）

すれ違った人々 ①

小野勇

T君が来て「書評」のために、私の高等学校から大学時代ーつまり大正末期から昭和初年にかけての日本文学について何か書けと言う。しかし、鳥瞰図的に書くなどと言うことは、私の手にあまる問題である。その用意も資料も今はない。そこで私はT君に頼んで、若い頃私と言う小さな流星が、接近し何かしらをつかんで去っていった文学史に残る惑星的存在のいく人かについてのつかのまの印象を書き連らねて見ることにした。もちろんこれは作品批評ではない。批評を書くならば、も一度作品を読み返して見なければ到底自信も持てないし、第一に非礼でもある。その上悪いことに私は自から人々ー殊に作家に接近しようとしたり、後輩としての礼をとったりするには、あまり人見知りが強かった。だからこの印象記と言っても、ほとんど友人の後からついて行って、黙ってすわっていて、同席の人々の会話を聞いていた時のものに過ぎない。今にして思えば、後日わが国の文壇を背負う様になった方々の若き日に、もっと師事したり、もっと度々謦咳に接しておけばよかったと思う。ーしかし今となっては詮無き繰言にすぎない。題して、この文を「すれ違った人々」とする所以である。

悲哀をよぶ三味線の音

十一谷義三郎氏の巻

「唐人お吉」（昭和三年）及び数々の英国十九世紀小説の名訳者、十一谷義三郎氏は昭和十二年に亡くなっている。私がお会いしたのは大正十五年か、昭和二年であったと思うから、三十歳前後であったのだろう。大正十二年創刊の「文芸春秋」に又大正十三年十月創刊の「文芸時代」の同人として書かれた、その黒光りのする様なしぶいつやがあり、いかにも外国文学の香をただよわせている短篇小説を読んで、私は芥川龍之介の所謂開化物に登場する様な長身白皙で、洗練された紳士を想像していた。

その日の訪問の用事は、私と私の友人で今東海大学にいる崎山正毅君とがアルバイトに依頼された翻訳の原稿をお見せする為であった。当時ある書店が文学事典の様なものを計画し、十一谷さんもその編輯委員であったのだろう。友人で国文学科にいた神崎清君を通じて、外国のそうした事典の翻訳の一部を依頼されたのだった。かねがね英文学者としてもすぐれた方と伺っていたし、翻訳書も既にあった十一谷さんは、しかし想像と違って、ずっと年よりふけて見える痩身で、顔色もあまりさえなく、ご病身に見えた。内向性のどちらかといえば人づきあいは上手な方ではないように見受けられた。それでも私達後輩は心よく迎えて下さった。お宅は今の東大農学部の裏から上野へ出る途中、桜木町といっていたところかと思う。しかし確実ではない。門と玄関の間に木が多く、廊下の突き当りの庭に面した書斎は日本間であった。寒い季節の午後だったので、部屋もあまり明るくなかった。壁面にはおびただしい洋書和書を入れた書棚があり、庭に近い紙障子の傍にある机に向っている十一谷さんの近くに坐って私達はお話をうかがった。もちろん私達が当時出していた「辻馬車」の同人だとは御存知であったろうが、しかし私達の作品を読んでいらっしゃったか、どうかはわからない。とにかく後輩の英文学生と思っていられたから、大学の英文科の噂話が出た。例えば市河三喜先生は対談していると、いかにも大人（たいじん）の風ぼう通り、どこかつかみどころがないが、お手紙をもらうと実に明確適切に先生の御意見がわかるとか、当時留学から帰られて日の浅い斉藤勇（たけし）先生の話などが出た。斉藤先生については、十一谷さんは余り好意を持った話し振りでなかった。その内どう言うきっかけからか、西洋笑話のような話になった。ある医者が心中したいという若い二人に毒薬の調剤を頼まれて、故意に下剤を服まし喜劇に終らせる話だった。「新百話」かなにかにあるものだろう。その頃になるとむしろ憂鬱そうだったお顔も明るくなり私達の心も打ちとけていた。

書斎から少し離れた茶の間で私の訪問中ほとんど始めから終りまで、爪弾きの三味線が、それこそ稚拙な音を響かせていた。私は人伝てに、その頃十一谷さんが、少し年上の女の人と結婚されたとか聞いていたので多分その方が稽古をされていたのだろうと思っていたが、それにしても稚拙だし、曲も正当な三味線のものではなかった。十一谷さんの短篇から想像していたもの、その学識、書斎のたたずまい、お話の内容、そのいずれともあまりにかけ離れていたので、私達はひどくとまどった感じを抱いて帰った。そしてその後一度もお目にかからなかった。結局計画の文学事典は出版されず、やがて昭和三年「唐人お吉」が出て、十一谷さんのライフ・ワークとなった。その丹念な資料の渉猟と共に、凝りに凝った擬古典主義とも言うべき文体の力作を愛読しながらも私はいつも耳の奥底に、あの日のあの稚拙な爪弾きの三味線の俗っぽさを聞きつづけて少し悲しい思いがした。しかしそれは大阪生れだと言う十一谷さんの中にある市井人のもつ悲哀でもあったのであろう。

（文学部教授）

□末川博　総編集
戦争と平和
ー全六巻ー
戦争と平和！
それは、つまるところ
人間の在り方の問題である
各巻平均三〇〇頁・四五〇円
雄渾社